

## [概要]

本稿では、サウンドスケープと文化的景観の統合的理解という地域の包括的理解を目的とする新たな分析視角を提示し、従来の文化的景観に関する研究で扱われてこなかった聴覚的な側面とサウンドスケープ研究で議論が不十分である人間活動に着目して研究を行う。観光現象に伴う街路整備や文化的景観およびサウンドスケープといった近代の価値付けのシステムが文化のオーセンティシティを創り出してきた過程を明らかにし、そのシステムが地域の文化的景観に与えた影響について人間の活動に踏み込んで考察する。文化的景観やサウンドスケープは、景観や音といった国土空間に価値を付与し、ローカルなものをナショナルなものへと位置付ける契機となった。八尾旧町で生活用水として利用されてきたエンナカは、安全性や観光を意識した整備によって住民の近接性が低下した。住民にとってエンナカの水音は日常的な音であったが、「残したい日本の音風景 100 選」に選定され、価値付けが行われた。街路整備によって音が変化する中でのせせらぎを演出する整備は、真正性への配慮とも解釈できる。以上より、文化的景観やサウンドスケープの概念は国の政策に取り込まれ、意味や価値を国土空間に与え、オーセンティシティとなるような観光資源を創り出す契機となった。八尾旧町のエンナカの変容は、伝統を創造しようとする政策的影響を受けた文化的景観の再編過程として理解できる。

**キーワード：**オーセンティシティ、文化的景観、サウンドスケープ、近代性